“日労”系指導者の戦後と『社会思潮』(4)
――松井政吉氏に聞く

はじめに
1　戦前期の活動と日本労農党
(1)　戦前期の活動
(2)　日労党の理念と指導者（以上，第470号）
(3)　戦時体制の成立と三輪寿壮
2　日本社会党の結成と“日労”系の指導者
(1)　“日労”系指導者の公職追放（以上，第472号）
(2)　“日労”系の結集と社会経済研究会
(3)　日本政治経済研究所の設立（以上，第475号）
3　『社会思潮』の創刊と編集
(1)　創刊の経緯（以上，本号）
(2)　『社会思潮』の編集

3　『社会思潮』の創刊と編集

(1) 創刊の経緯

『社会思潮』の復刻

松井　さて，本題の『社会思潮』のことについて述べます。この間，『社会思潮』に目を通しておこうと思って探しておりました。あの雑誌は当初は薄っぺらなもので４，50頁くらいしかなかったのです。自宅に無かったので，わが社会党の本部にあるかと思って聞きましたら，ここにも無いという（笑）。

『社会思潮』は立派な雑誌でしたよ。機関誌だったけれども，党派色がそんなに強く出ておらず，教養誌的で，とても勉強になった雑誌なんです。インテリの党員にとくに評判が良かった。あの『社会思潮』も機関紙の『社会新聞』も，大原社研が復刻してくださるなんてうれしいかぎりです。水長（水谷長三郎）も冥土で喜んでいると思いますよ。

僕は『社会新聞』についてほとんど知らないのです。他方，『社会思潮』は水長が根回し，奔走してできたのです。鈴木茂三郎さんの没後20周年を偲ぶ会（1990年５月）にあなたの研究所の所長の二村一夫先生が来賓として出席され，「どうかよろしく頼みます」と協力を頼まれました。前回も話しましたが，一般に無産政

党の歴史において日労党や，社会大衆党の主流派に位置した日労系の指導者に対する評価は，断罪的で，まことに厳しいものがあります。厳しいというよりはむしろ，片寄っていて，正しく評価されていない。このことは社会党の歴史についても言えるのです。社会党の歴史についてはどの時期であれ，きちんと記録して欲しいと願っているので，僕はあなたの調査に全面的に協力します。

――有り難うございます。私どもの大原社研は昨年，創立70周年を迎えました。研究所ではこれを記念する事業の一つとして，「戦後社会運動資料」の集成・出版を企画しました。そして第１回目の配本として，本年中に『民報』とその改題紙『東京民報』を復刻するため準備を進めています。『社会思潮』は来年度の出版予定で，いま解題を執筆中であります。

『民報』は，戦争が終わった年の1945年12月１日，松本重治氏や長島又男氏など同盟通信社のリベラル派のジャーナリストが創刊したオピニオン・ペーパーで，軍国主義者の戦争責任追及や象徴天皇制への移行などで論陣を張り，日本国憲法の制定にも影響を与えた新聞のようです。松本氏によりますと，ＧＨＱの中枢部も『民報』の論説を翻訳して回し読みしたそうです。

（注：民報社の『民報』は1991年６月に本体7巻，93年７月に解題・記事索引を別巻として法政大学出版局から全8巻本で出版された。『社会思潮』は1991年10月，全８巻本で出版された。）

松井　『民報』というと，社会党の総務部長であった荘原達さんがかつて社長をされた新聞だろう？

――そうです。松本重治氏に次いで，民報社の2代目の社長でした。松本氏が公職追放となり，頼まれて社長となったようです。荘原氏は三輪寿壮，嘉治隆一，河野密氏らとも昵懇の間柄であったようですね。

松井　そうらしい。知っていますよ。荘原さんは大変な人格者でした。東京帝大で新人会の運動を指導した人はやはり違います。博識で，人格高潔で，人間ができていました。荘原さんはとても腰が低く，謙虚で，細野三千雄さんなどは総務部へ入り浸り，代議士会のことをすっかり忘れて荘原さんと話をしていたのです。僕も代議士時代，総務局を担当していましたから何かと指導をうけました。三輪先生も河野密も荘原さんに対しては一目置き，敬意を表していたのです。

日本フェビアン協会との関係

――松井さんはいま，日本社会党に対する歴史評価が必ずしも正しく行われていないと言われました。これは『日本社会党20年の記録』（1965年）や『日本社会党の三十年』（1974年）が左派寄りにできているということでしょうか。

松井　……。要するに，歴史は公正かつ客観的に書かなければならぬ。この機会に改めて『日本社会党の三十年』の頁をめくってみましたが，『社会思潮』のことは一行も出ていなかったのです。浅沼（稲次郎）のことは書いてありました。だが全体として日労系に対しては厳しいし，その果たした役割や，日労系が戦後，中間派ないし右派として正当に活躍したことについては十分に紹介されていない。『社会思潮』は水長が主幹となっていたけれども，実際は日労系の連中が出していたのです。あの雑誌に左派は関与していない。

――先日，千葉県船橋市に木原実さんを訪ねまして，『社会新聞』の後半期の編集事情や『社会思潮』について話を聞いて参りまし

た。木原さんによれば，日本社会党は当初，日本フェビアン協会の協力のもとにかつての協会の機関誌『社会主義研究』の復刊をめざしていて，これを党の機関誌にしようと試みたということでした。

また昨年の夏休みに青森市へ行ってきました。淡谷悠蔵さんから証言を得るためですが，実は淡谷さんも「『社会思潮』かい，あれはフェビアン協会の雑誌だよ」と迷うことなく言われたのです。

淡谷さんは90歳を過ぎた高齢の方です。僕は，淡谷さんが高齢で記憶が薄れ，何か勘違いされているのだろうとその時は気に止めませんでした。けれども調査を重ねてみますと，『社会思潮』の創刊と『社会主義研究』の復刊の話がどういうわけか重なってしまう経過があるのです。

『社会思潮』の発行人は丸岡尚氏です。その丸岡氏の奥様の丸岡ミサオさんや丸岡氏の姉の岩田祥子さんのお話でも，日本フェビアン協会のことが話題として出ました。丸岡尚さんご自身，再建された日本フェビアン協会のメンバーで，再建にあたって資金を出していたようです。

松井　僕は，日本フェビアン協会のことや，『社会主義研究』の復刊について何も知らないのです。いまの木原実さんの話，僕は初めて聞きます。日本フェビアン協会の雑誌をまず創刊し，それを社会党の機関誌として扱うなんて，僕には考えられない。常識でも考えられないと思うよ。『社会思潮』の創刊に際しては浅沼（稲次郎）や水長，また三輪（寿壮）先生も陰で編集を手伝っていたわけで，僕が三人から聞いた話とは全然違うね。僕には信じられない話だな。

確かに水長はフェビアン運動に熱心だったと思います。昔からの会員でした。三輪先生も協会に入っていたようだけれども，フェビアン協会の『社会主義研究』を……，あのね，「研究」と名の付く雑誌を社会党の機関誌にするなんて考えられるかい？　僕は当時，党の福島県連の書記長で，また常磐炭鉱における労働組合結成のオルグ活動の責任者でもあり，中央の動きに疎い面があります。また僕自身，彼らの運動にあまり関心がなかったのも事実です。しかし月に３，４回は上京していたのであり，僕なりに党員のさまざまな動きは把握していました。フェビアン協会が『社会思潮』の創刊を準備したという事実はないと思います。

ついでにこのことも述べておきます。社会党においてフェビアン運動に熱心だったのは安部磯雄先生と片山哲さんです。僕自身，何ら関係はないけれども，党員のうちにはフェビアン協会に入っていた人は多かったと思いますよ。学者出身の代議士やインテリの党員，とくに東京帝大の出身の人が多かったという印象があります。鈴木茂三郎さんの日無系で入っていた人はいたのかな。いないね。日労系や社民系のインテリに実際，フェビアンのメンバーが多かったと思います。

浅沼の提言

松井　『社会思潮』の創刊のことですが，最初に言い出したのは浅沼で，彼が提案して実現をみたのです。

詳しく説明しよう。当時，社会党に党の機構や組織の拡大強化を検討する機関として，常任中央執行委員や中央委員で構成する組織委員会という審議機関がありました。座長とか会長とかいう名称だったかもしれないが，代表は，常任中央執行委員で組織部長の浅沼です。僕は当時，中央委員で，組織部に所属して浅沼を補佐しておりました。当然ながら組織部が主宰した委員会であり，定例の会合でしたから，僕も通

知を受けて上京し出席しました。

昭和21年４月10日に戦後最初の総選挙が行われ，僕は落選したけれども，社会党は大躍進でした。組織委員会はこの結果を受けて，さらに党の機構を整え組織強化をはかるためにどうすべきか検討したのです。翌５月か，６月でも初めの頃だろう。

浅沼がいささか怒ったのです。社会党が結成されたといっても，党の方針や政策を党員と国民に伝える機関誌が出ていなかったのです。機関紙（『日本社会新聞』）の方はその年の初めに創刊されたはずです。けれども新聞のほうは裏表2頁のちゃちなもので，創刊されたと思ったら休号となったりで，事実上無きに等しかったのです。だからだと思うのです。席上，浅沼が「宣伝が大事な時期に機関紙活動が停滞していたんじゃ，党の活力を一体どこから引き出すんだ。機関誌を急いでださなければならぬ」と演説をぶったのです。

浅沼は煽動的な政治家です。日労系の論客としては河野がいます。その対極に浅沼がいるという感じです。僕は三輪先生を政治的な師匠として尊敬し，指導を受けてきましたが，浅沼と河野にも大変可愛いがってもらいました。浅沼は「百の理論よりも一つの行動が大事なんだ。行動こそが運動の前進を導くんだ」という考えで，自らも実践しました。さらに，浅沼は労農市民大衆へ向けた宣伝・煽動の大切さを理解していました。浅沼は戦前に，自分で新聞社をつくっていたのですよ。

――『社会新聞』（編集発行人・藤野光弘，旬刊）でしょうか。

松井　おう……。そうなんです。昭和6，7年ころだと思うが，浅沼は田原春次の協力を得て社会新聞社を設立して社長となっています。田原は早稲田大学を卒業したのち，さらに渡米してミズーリ州立大学の新聞学部に留学し，卒業帰国して朝日新聞社に入社した経歴をもっています。彼は社会党では『朝日新聞』の論説主幹だった細川隆元さんと並ぶ，ジャーナリズムに精通した人物なんです。詳しくは記憶していないが，浅沼は田原からの提言で『社会新聞』を創刊したらしい。

『社会新聞』は日労系の新聞です。主筆は河野密だったと記憶する。大事なことは，この点なんです。旧日労党が主体であった全労党（全国労農大衆党）に，『全国労農大衆新聞』というれっきとした機関紙があったのですよ。田原の提言があったといえ，浅沼はそれにもかかわらず，『社会新聞』を創刊したのです。浅沼は，党員でない労農市民大衆に対しても政策や方針を宣伝し，理解・支持を得なければ党は大きくならないし，帝国議会に議席を得ることなど夢物語だ，と常々説いていたのです。あの『社会新聞』を創刊するにあたって誰が金をだしたのだろう。もしかしたら河野が出したかもしれない。河野はミニ財閥でした。

党が発行する機関紙の場合，政治誌や理論誌もそうですが，これらはいわば政党と国民を結ぶパイプです。こういうパイプは何本あってもいいんだ，というのが浅沼の基本的な考えでした。だから『社会新聞』は全労党系の新聞として，機関紙とは別に発行され，その全労党が片山・西尾さんの社民党と合同して社会大衆党となっても，引き続き発行していました。少し横道にそれてもいいかい？

――はい。

松井　社会党は昭和26年10月に，講和・安保条約の問題をめぐって対立し，左右に分裂しました。いわゆる第２次分裂です。この結果，社会党の中央機関紙の『社会新聞』も廃刊となり，これに代わるものとして左派は『党活動資料』（のち『党活動』と改題）という小さな新聞を出しました。

一方，僕らの右派は日本社会新聞社という新しい新聞社を設立して，結党時と同じ名前の『日本社会新聞』を創刊して，これを右派社会党の機関紙としたのです。浅沼は，この日本社会新聞社の社長でもありました。そして副社長が田原春次で，編集発行人を兼ねていたと思います。編集には三輪先生と大変仲の良かった蝋山政道先生や，関嘉彦先生なども協力されたようです。

さて，党の組織委員会の会議のことに戻ります。このように，浅沼は国民各層へ向けた自らの宣伝活動を戦前からとても重視していたのです。

昭和21年４月の戦後最初の総選挙で社会党が大きく躍進し，さらにこれから片山さんを中心に政権をとろうという時期に，まだ機関誌が出ていなかったのです。浅沼は，党の組織強化の一環として機関誌の創刊と『社会新聞』の拡充を考えたのだろう。当日の会議で，そういう趣旨の演説を行い，組織委員会の決定として『社会思潮』の早期の創刊が決まったのです。そして，浅沼が水長に「機関誌を早く出してくれよ」といって創刊へ向けた準備が始まった，というのが僕が記憶している経過なんです。

水谷長三郎の寄与

――このコピー（『社会新聞』第22号，1946年９月28日）をご覧になってください。先日送りました資料に，うっかり同封するのを忘れてしまったものなんです。この記事によりますと，社会党は1946年９月に中央大学講堂で第２回大会を開きました。このとき各部報告として情報宣伝部の報告もなされ，「出版部を新たに設置し，書物を通じて党の新たなる文戦綱領，政策を国民大衆に徹底をはかる」と報告し，機関誌の創刊を大会の名においてこれを出版部から発行することを公表しています。これは，６月の組織委員会で党の組織拡大の一環として機関誌の創刊が決められ，第２回大会において正式決定をみたという経過でしょうか。

松井　手続き的にもそういう経過だろうな。

――松井さんはいま，浅沼稲次郎氏が水谷長三郎氏に「（機関誌を）早く出してくれ」と申し入れた旨の話をされました。これはどういう意味ですか。水谷氏が機関誌の創刊の責任者だったのですか。

松井　そうです。略して「情宣」といっていたが正式には情報宣伝部で，水長は当時，常任中央執行委員で，情宣部長を兼ねていました。情宣部長は，現在では広報部や宣伝部だろうけれども，『社会新聞』の発行や党の出版関係，さらに外部へ向けた宣伝・広報を担当していたのです。水長は『日本社会新聞』を創刊する際の責任者であったし，機関誌のほうの創刊の責任者でもあったのです。

少し脱線します。京都生まれで京都育ちの水長は，浅沼とは違う意味の庶民性をもっていました。弁護士ですから当然のことですが，人間関係も生活も誠実で潔癖でしたけれども，またにぎやかなところがとても好きでした。彼は情宣部長ののち，昭和21年10月の第２回党大会で議会対策委員会の委員長に選ばれ，また党のスポークスマンを兼ねていました。さらに水長は“ フンドシ写真 ” で一躍時の人となり，国民的な人気が出ました。彼は社会党の顔の一人なんです。

――“ フンドシ写真 ” とは何です？

松井　あなたは知らないかい。水長は片山内閣では商工大臣でした。日本の経済復興を実現する条件として，エネルギーの確保の問題がありました。当時のエネルギーは石炭です。水長は石炭の増産を働きかけるため産炭地を視察することになったのです。そして僕がかつて働い

ていた常磐炭鉱にもやって来て，フンドシ一枚で坑内を視察し，その写真が配信されて新聞にデカデカと載ったのです。あれが“やらせ”の写真であったか，僕は知らない。とにかく水長がフンドシ1枚で坑内を視察している写真が話題となり，石炭増産のキャンペーンになったことは事実だろう。

水長は，この“フンドシ写真”で話題となっただけでなく，機知に富んでいました。彼のトレードマークは蝶ネクタイです。戦後最初の総選挙で社会党が躍進し，人気が沸騰してマスコミ界でも社会党のことが気になって仕方がない状況になりました。新橋駅の堤ビルにあった党本部に記者連中が毎日押しかけてきて，水長が蝶ネクタイで，ふんわりした京都弁で会見をしておりました。

社会党は翌年，昭和22年４月の総選挙で143議席を得て第1党となり，片山さんが首相となって内閣をつくりました。僕は社会党が第1党となり，片山内閣が誕生した背景に，勝因はいろいろあげられますが，水長の存在があり，スポークスマンとして水長の果たした役割を忘れてはならないと思います。

水長は頭脳明晰で，頭の回転も早い。ユーモアもありました。さらに，昭和３年の普選第１回の総選挙に当選した，無産政党の最初の代議士という輝かしい経歴もあります。彼は，当時の社会党におけるスターの一人でした。僕は最近出した『裏方政治家の人生』（1990年）という本で，彼のことを紹介しないでしまったのです。占領期の政治や社会党において水長の存在は大きいと思います。『社会思潮』も，水長の尽力があって始めて創刊されたのです。

結党時，社会党には金が無かったのです。そのため『社会新聞』の場合は，のちに社会党の代議士となった田中斎という人から面倒をみてもらいました。田中さんはもともとは明治大学の教授で，その教授を辞めて家業の中部日本新聞社や東京新聞社の経営をされたということでした。

しかし，最初の何号かは水長の昔からの友人で，東京で山水社という出版社の経営者をしていた，名前を度忘れしてしまいましたが，その方に紙の手配や印刷をお願いして創刊にこぎつけたのです。『社会思潮』の場合も，水長が折衝して，党の中央委員であった丸岡尚さんの会社にお願いしたのです。

――丸岡尚氏の協同公社のことですね。

松井　そう，丸岡さんの会社です。丸岡さんが言っていましたが，創刊当初は毎月の企画や執筆者を誰にするかという人選も，水長が全部決めていたとのことでした。それだけでなく，片山さんはじめ党の幹部連中に執筆を頼んでも，連中は多忙だから書きやしないのです。水長は催促や原稿集めまでしていたのです。さすがに大臣になってからはそんなことはやっていません。けれども彼は『社会思潮』の主幹でしたから，いろいろな問題が起こるたびに西尾（末広）さんの了解をとったり，病気中の浅沼にも連絡を入れたりで，ずいぶん奔走したのです。

先ほど僕は水長について，社会党におけるスターの一人といいました。確かに彼にはにぎやかなところがありました。しかし彼はとても神経がこまやかなんです，また世話好きで，人情味があり，何よりも仕事の面でも人間関係でも誠意がありました。水長は大臣になっても『社会思潮』の主幹を辞めていない。いったん任務や仕事を引き受けると，それをきちんと守り，決し投げなかったのです。

このことも紹介しておきます。西尾さんが昭和35年１月，民社党を結成しました。社会党における3回目の，歴史に残る決定的な分裂です。水長も西尾さんについて民社党の結成に参加し

て，党を出て行きました。水長は西尾さんとの長い盟友関係を大事にされたのだろう。僕ら日労系の連中は党に残り，新しく右派を形成しましたが，水長は迷うことなく西尾さんと行動を共にされたのです。立派ですよ。

民社党ができてから間もなくのことです。僕は，水長がどこか身体の具合が悪いらしいということを耳にしました。僕はそれまで，浅沼の使いで何回か水長に会っておりました。だから彼には元気になって欲しいと思って，励まそうと部屋（九段の衆議院会館）を訪ねたのです。昭和35年の５月か６月，安保問題で政局が緊迫していたころです。水長が母校の京大病院に入院するため東京を離れるらしい，という話を聞いたのはその直後のことでした。そしてそれから何カ月かして，その年の師走だったと記憶するが彼は亡くなったのです。

あなたから『社会思潮』のことについて話を聞きたい，という電話や手紙がありましたとき，僕が一番先に頭に浮かんだのは水長の顔でした。三輪先生のことについて，学者先生の評価はまことに厳しい。水長については，研究の対象にされることはこれまでなかったと思うのです。僕はあなたに頼みたい。片山内閣の炭鉱国管問題にしろ，傾斜生産の問題で彼が提起した問題にしろ，『社会思潮』の創刊にしろ，社会党の歴史における水長の存在には実に大きなものがあると思うのです。ぜひ研究して，歴史の記録にとどめて欲しい。

――承知しました。

丸岡尚と丸岡重堯

松井　僕は長生きをしました。先輩同僚に恵まれ，自分でも幸せな人生だったなあ，と思っております。また，このごろは早くに鬼籍に入った同志のことが頭に浮かぶのです。三輪先生にしろ水長にしろ，社会党に対する期待と思い入れがあって陣列に参加したと思うのです。平和国家としての日本の復興を社会党の陣列の中で実現しようと志を抱き，人生をかけていたのです。彼らの志や活動について，公正にきちんと評価してあげなければならないと思う。

――『社会思潮』は，丸岡尚氏が社長であった協同公社の出版部門の一つ，すなわち社会思潮社から発行されています。いくら丸岡氏が社会党の中央委員であったとはいえ，社会党の機関誌を党外の出版社から発行するなど，通常では考えられないことです。それには何か特別な事情があったのだろうと思い，僕はこの間，丸岡ミサオ（尚氏の夫人）さんや岩田祥子（尚氏の姉）さんなど親族の方々から聞き取りを重ねておりました。ほんとうに驚いたのですが，丸岡尚氏の兄は丸岡重堯といい，その重堯氏が水谷長三郎氏と大原社研で同僚だったのです。

丸岡重堯氏は早稲田大学の商学部を卒業され，水谷氏は京都帝大の法学部でした。岩田祥子さんによれば，二人は大学在学中に友愛会における“労学会”の活動で知り合って，上京・上洛するたびに互いに泊まりあっていたそうです。丸岡氏は1918（大正７年）４月に卒業され，翌19年４月，これも岩田さんによれば，在学中にまとめたウエッブにおける産業民主制の研究が高く評価され，安部磯雄教授の推薦・紹介を得て，大原社研に入ったそうです。水谷氏も1920年４月，河上肇先生の紹介で京大の大学院に籍をおきながら嘱託として入り，二人は大原社研で翻訳や調査など一緒に行い，兄弟のような交わりをしていたそうです。

松井　丸岡（尚）さんの兄が丸岡重堯といい，水長と大変仲が良かったということは僕も知っています。丸岡尚さんから直接に聞いていますし，三輪先生や，社会党の総務部で荘原達さん

と昔のことについて語り合っているときなど，いつも丸岡重堯さんの名前が出てきていました。僕は一回も会ったことはないが，丸岡重堯さんは優秀な学者で，人間も出来ていたらしい。

――平貞蔵，三輪寿壮，河野密氏らと社会思想社――社会経済研究所で一緒に研究された方に松本重治氏がおります。松本氏は同盟通信社の上海支局長時代に，1936（昭和11）年12月における西安事件をスクープしたことで有名です。その松本氏が著書『上海時代（上）』（中央公論社，1974年）において，丸岡重堯氏のことについて「丸岡君は経済の実際問題に明るく，地についた議論をしていた。彼が，もし三，四十年の生命を与えられていたならば，日本社会党は，相当変わっていただろうと思われるぐらいの逸材であった」と高く評価しています。丸岡重堯氏は1929（昭和４）年２月，腸チフスで急死しました。三十代半ばでした。

松井　昭和４年というと，僕が遅れて専修大学に入った年です。ところで，社会党はみんなの志を得て土台を築いて行ったのです。社会党は当時，結党して一年ぐらいしか経っておらず，台所は火の車でした。書記の方々には給与を払わず，ここで「払わず」という意味は払わないというのではなく，現実に払えなかったのです。彼らは食糧難の中で，空腹に耐えながら仕事をしていました。書記の方々は実に献身的に働いていました。

僕は月に３，４回，党務報告のため福島から上京していました。僕はそのつどさつまいも，大豆など食糧をリュックに詰めて運び，本部に届けたりしていたのです。米だと統制違反になります。だから餅をついて，その餅を適当に切って運んだこともありました。

党本部といったって，引き出しのある机があれば上々で，机や書類棚などは自分で作って使っていたのです。これはほんとうの話なのです。書記局の連中は，僕がこういう話をすると「また始まったか」（笑）となります。

僕はこうした事実を，この機会にぜひ伝えておきたい。僕らの社会党は，党員のほんとうに浄財ですよ，なけなしの金を絞り出してこれを出し合い，手作りでつくったのです。このことを伝えておきたいのです。ここで少し休憩をとりたいが……。

――はい。

松井　社会党は当初，わが党に期待する方々から資金その他の面でいろいろ面倒を見てもらっていたと思います。丸岡（尚）さんは，生地の三重県でしたけれども，新興実業家の一人で，製薬会社（協同製薬）や製粉，製菓会社などを経営していて資産があったようです。丸岡さんは聖公会系の方だと承知していますが，キリスト教の熱心な信者でした。あれも困ってしまう。丸岡さんは，党の会議や研究会などの休憩時間に「少し祈ります」といって，部屋の隅っこで祈ることがあったのです。

丸岡さんはかつて賀川豊彦さんと一時期，活動を共にされたことがあったそうです。賀川さんの発案とアドバイスで会社を起こし，最初は陸軍被服廠とかの後援で「国民服」などの縫製工場を経営して成功し，戦時中に順次，事業を拡大したとのことでした。このことは河上丈太郎さんから聞いております。どうも，結党の際も，丸岡さんから資金の提供を受けていたようです。

繰り返しになりますが，社会党は当時，資金難で，機関誌を出すなんて実際上，できなかったのです。新聞，すなわち機関紙さえもきちんと出ていなかったのです。紙は当時，統制品でとても高く，簡単には買えなかったし，出版するにも戦災で印刷工場が少なかったし，専門に

編集・発行するスタッフも戦死や外地からの引き揚げが遅れて，確保できなかったはずです。

あれやこれや問題があって，結局，水長が，丸岡重堯さんの弟の丸岡尚さんに「君のところで出してくれないか」と頼んだのだろう。僕は，浅沼から「雑誌は丸岡さんに面倒を見てもらうことになった」と，事後的に聞いた記憶があります。水長が，浅沼に報告したのだろう。丸岡尚さん自身，水長とは兄と同様に親しい付き合いをしていたわけだし，彼は中央委員で，三重県連の書記長という党の幹部の一人なんです。さらに杉山さんからも口添えや，頼みがあったと思いますよ。杉山さんは党の顧問です。彼は麹町の丸岡さんの邸宅にあの時期，一緒に住んでいたのです。

このような経過で，『社会思潮』は，丸岡さんの会社で創刊・発行を引き受けたのだと思います。

いま思い出しました。先ほど，機関紙の『社会新聞』は山水社という出版社の社長に面倒を見てもらったと言いましたが，その社長は竹内克巳さんという方でした。彼も中央委員でした。

社会党は現在，自前の印刷工場をもっています。出版局もあります。けれども，当時は党内で機関紙・誌を出すことは資金の面や用紙の確保，スタッフいずれの面でも困難で，党の関係者に無理をお願いしたのだと思います。

――松井さんは戦前，丸岡尚氏と一緒に活動したことはあるのですか。

松井　ない。丸岡さんは歳は僕と同じくらいです。丸岡さんは日消連（日本消費組合連盟）の活動家だったらしいが，僕らのような活動家ではなかった。僕らは労働組合，農民組合の実践運動の中でずうっとブタ箱や刑務所を回っていたんだけれども，丸岡さんはそういう意味での活動家でない。彼は賀川さんを尊敬していて，賀川さんと一緒に消費組合の運動や，キリスト教の農村伝道を一緒にやったということでした。彼はどちらかというと学者・評論家のようなタイプの人間で，よく本を読んでいました。丸岡さんは事業家といっても，経営は支配人の方に任せて，自分は杉山さんや河上さんと談論風発していたようです。

『社会思想』との関係

――丸岡家の記録によれば，1945（昭和20）年11月，協同公社の出版部門として社会思潮社を設立しています。丸岡ミサオさんや，協同公社の経理顧問をされていた多賀和夫氏によれば，社会思潮社の設立は，丸岡尚氏が，かつて兄の重堯が同人であり，かつ編集発行人となっていた『社会思想』を復刊することに目的があったそうなんです。尚氏が経営する協同公社総本社の顧問は賀川豊彦氏で，会長は杉山元治郎氏とのことでした。そして新しく設立した社会思潮社の顧問に，三輪寿壮氏が就任しています。松井さんはこのことについてご存じですか。

松井　この件については知らない。三輪先生は弁護士です。だから，いろいろな会社の顧問を引き受けていたわけで，社会思潮社の顧問もその一つであったろう。

このこととは別に，先生が丸岡さんの社会思潮社に出入りして，事業活動を応援していたことは確かです。先生が公職追放中，追放中ですから公的活動にタッチできないわけですが，先生はこの時期，『社会思潮』の編集委員を引き受け，東京第二弁護士会の研究会とかに出たりしていろいろ勉強していました。河上丈太郎さんも，丸岡さんや彼の事業を応援していたんじゃないのかな。

――1921（大正10）年秋，三輪寿壮，平貞蔵，嘉治隆一，蝋山政道氏ら東大新人会のO

Bが社会問題の研究・啓蒙団体として社会思想社を設立し，翌年4月に機関誌として『社会思想』を発行します。

この『社会思想』は事実上，日本労農党の理論誌の役割を果たすと同時に，大正末期から昭和初期における日本社会の分析，とくに普選の実施という新しい時代における日本社会の動態分析に新しい地平を築いたという点で，僕自身，高く評価しているのです。

丸岡重堯氏はこの社会思想社の同人でした。また，丸岡氏は三輪寿壮氏に次いで『社会思想』の編集発行人や，社会思想社が母体となってつくった社会経済研究所の経営責任者にもなっています。

岩田祥子さんや丸岡ミサオさんなど身内の方，さらに多賀和夫氏によれば，社会思潮社を設立したのは丸岡重堯氏がかつて編集発行人を務めていた，社会思想社の『社会思想』を復刊することに主眼があったそうなんです。松井さんは，このことについて何かご存じですか。

松井　知らない。三輪先生と丸岡重堯さんの関係について，僕自身，個別具体的に知っているわけではない。三輪先生が，「政治研究会では丸岡君と一緒だった」とか，「社会思想社では丸岡君が研究会をリードしていた」とか，「僕の後，丸岡君に頼んで『社会思想』の編集発行人になってもらった」「社会思想社の一番の功労者は丸岡君だよ」とか，その時々の話題・雑談の中で，丸岡さんの名前が出て来ていました。僕自身，丸岡さんの論文を何も読んでいない。

丸岡尚さんが，兄貴が関係していた『社会思想』を復刊するという企画ですが，これは可能性として考えられます。あなたがさっき話したように，フェビアン協会の『社会主義研究』を復刊するという企画だってあったと言うんだもの。しかし『社会思想』は実際は復刊されなかったんだろ？　『社会思想』を復刊するつもりでいたところに，急きょ『社会思潮』を出すことになり，復刊の話は断念したのだろうか。それとも三輪先生や平貞蔵先生の判断で，結局出さないことにしたのだろうか。

丸岡尚さんは，三輪先生の事務所に時々顔を出していました。丸岡さんの自宅は麹町です。河上丈太郎さんの神楽坂の自宅にとても近く，二人は行き来していました。二人はかなりの付き合いだったはずです。けれども，河上さんが社会党の委員長で僕が総務局長としてコンビを組んでいたとき，昔のことについてずいぶん語り合ったものですが，社会思潮社が『社会思想』を復刊するために設立された云々は，河上さんからも三輪先生からも僕は何も聞いていないのです。

（つづく）